

## この地に遊ばんひとは必ず見るべし

——中盛彬<sup>もりしげ</sup>の泉州案内——

### 橋 弘 文

#### はじめに

中盛彬は、『熊取町史・本文編』<sup>1)</sup>によれば、天明元年(1781)に、熊取谷の大庄屋である降井家(中左太夫家)に生まれている。中盛彬は、文化2年(1805)から天保5年(1834)まで、30年以上にわたって熊取谷の大庄屋をつとめている。

興味深いことに中盛彬は、熊取谷の大庄屋という地域の指導者である一方で、当時の先端の学問や文芸を吸収し、さまざまな分野の人びとと交流をもっていた。とくに中盛彬は、西洋天文学や儒学、そして国学に関心をもっていた。そして『太陽明界六曜運施正儀釈』など多くの著作をのこしている。中盛彬の思想については、日本の近世の思想史を研究している桑原恵の『幕末国学の諸相：コスモロジー／政治運動／家意識』<sup>2)</sup>が、くわしく論じている。

この中盛彬の著作の一つに『かりそめのひとりごと』がある。『かりそめのひとりごと』は、昭和42年(1967)に、出口神暁の校訂と解題によって、翻刻され、刊行されている<sup>3)</sup>。出口神暁の解題によれば、中盛彬は『かりそめのひとりごと』を、文化13年(1816)から天保年間(1830~44)のなかごろまで、書いていた。

ちなみに中盛彬の『かりそめのひとりごと』を私たちに読みやすいかたちで発行した出口神暁は、昭和時代の大阪の有名なコレクターでもあった。出口神暁は、明治40年(1907)に岸和田の称名寺という浄土真宗のお寺の長男として生まれ、岸和田市役所などに勤務する一方、郷土資料の蒐集や研究をしていた。出口神暁は、鬼洞文庫と名づけた文庫にそれらの蒐集した資料を収めた。この鬼洞文庫は、現在、その大部分が関西大学図書

館に入っている<sup>4)</sup>。

『熊取町史・本文編』は、「(『かりそめのひとりごと』で)記述された内容は、熊取を中心とした泉州地域の歴史・故事・逸話であり、現代的な感覚からは、地域史的な内容をもっている。」とのべている。中盛彬は、『かりそめのひとりごと』の序言で、つぎのように書いている。

あが州にかかれるかぎりを、おもひたすま筆にまかせてかひつけぬ。<sup>5)</sup>

「あが州」とは、いうまでもなく「我が州」=泉州をさしている。盛彬は、彼自身が暮らしてきた泉州のことにかんして、思い出すままに、記述しようとしている。こうした『かりそめのひとりごと』の目的は、続後編の序で、より明確にのべられている。

ただ人の忘れてすたりぬる草々の古き跡を、ひろいただし、珍らかに、世におかしき、今のことをも尋ね蒐め書のこして、なからむ後の露の玉と、曾孫らに忍ばれむほどは、なにかは苦しかるべきと、思ふものから、そをだに博くさぐらむことのかたりければ、あが国にかかりつらへる限りを一つ二つ書蒐めて、先に「かりそめのひとりごと」ふたまきをしるしぬ。<sup>6)</sup>

盛彬は、二つのことについて書き残そうとしている。一つは、盛彬自身が暮らしてきた泉州(「あが国」)において、多くの人びとが忘れかけているような過去の出来事や生活について、書こうとしている。今一つは、盛彬が生きていた同時代に起きためづらしい出来事や不思議な出来事について書き残そうとしている。

中盛彬は、『かりそめのひとりごと』で、かれが住ん

でいた熊取だけでなく、泉州あるいは和泉国のさまざまな地域について書いているが、盛彬はいくつかの場所にかんして、「この地に遊ばんひとは必ず見るべし」とのべている。いわば盛彬好みの観光案内のような記述をしているのである。それらの盛彬の泉州おすすめスポットをめぐる記述は、盛彬が過去にたいしてどのように向かっていったかという特色を表している。第一に、盛彬は、文献資料の探求によって実証的に過去に向き合っていた。第二に、盛彬は、道具やモノに愛着をもち、それらを通して過去を探究した。そして第三に、盛彬は、怪異をふくむ口頭伝承を排除することなく記録した。

### 1-1(1) 半田村道教寺の鐘

中盛彬は、泉州おすすめスポットの一つとして、半田村道教寺の鐘をあげている。盛彬は、半田村（現在の貝塚市半田町）にある道教寺の鐘について、つぎのように書いている。

道教寺の僧、教祐は東本願寺二世宣如の寵弟だった。教祐が自分の寺に鐘がほしいといたので、東本願寺二世宣如が鐘を与えた。天和2年（1682）4月にその鐘を道教寺につらした。この鐘は、もともと、河内国沼河郡の勝軍寺の鐘だった。この鐘には金光明経の品名が彫られている。この鐘には正暦3年（992）12月の銘がある。元弘のころ（1331～34）、楠正成が朝敵追討のために勝軍寺に勢ぞろいしたとき、この鐘を得、そして戦場をこの鐘をもってまわったという。<sup>7)</sup>

おそらく盛彬は、道教寺の鐘の歴史的な古さから、この鐘を見ることをすすめていると思われる。盛彬は、道教寺の鐘の歴史的な古さを、その鐘に刻まれている「正暦三年（992）十二月」という文字資料から判断している。

盛彬は、道教寺の鐘についてのべる前に、半田村の地名伝説に言及している。

半田村のもとの名は秦村である。秦河勝の子孫の秦雄依という人が居住していたところから秦村と名づけられたといわれているが、それを示す書かれた証拠はない。この村にある道教寺が秦雄依の末裔で秦氏を名乗っているが、これも証拠がない。この村の東に畑村がある。まちがえないように、近いころに、秦を半田に書き換えた。古い物には秦村と書いてある。

盛彬は、半田村の地名伝説を鵜呑みにしていない。盛彬は、その言い伝えを、文字資料をもとに検証している。こうした過去に向き合うしかたは、『かりそめのひとりごと』の一つの特色になっている。

### 1-1(2) 安松村と檜井村のあいだにある地蔵

中盛彬は、安松村と檜井村のあいだにある地蔵の石像について、やはり歴史的な古さから、人びとに見ることをすすめている。盛彬はつぎのようなことを書いている。

安松村と檜井村のあいだの八丁縄手に、石の地蔵菩薩が立っている。この地蔵のうしろに承平8年（938）2月18日と彫りつけられている。この地蔵は享保11年（1726）の絵図にも記されている。承平8年（938）は天慶1年でもあり、平将門の乱が起こった年である。

ここでも盛彬は、地蔵菩薩の石像の歴史的な古さを、地蔵の石像のうしろに刻まれている「承平八年（938）二月十八日」という文字から判断している。

しかし、盛彬は、何にたいしても書かれた証拠がなければ、見る価値がないと言っているわけではない。

### 1-1(3) 成合寺の蓮華

成合寺は現在の熊取町の成合にある。中盛彬は、この成合寺に遊びに行ったひとは必ずそこにある蓮華を見たほうがよいと、人びとにすすめている。盛彬は成合寺の蓮華について、つぎのように書いている。

成合寺の開基の愚白和尚が、ある時、村の人びとを成合寺に集めて、こう言った。「能登の総持寺で火事がおきたので、この庭石に水をかけなさい。」そして村人にその庭石に水をそそがせた。水はしゅうしゅうとしみこんだという。数ヶ月後、能登の総持寺から使いの僧が成合寺に来て、出火のときに火消人足を賜ったことを感謝した。

成合寺の愚白和尚が亡くなったとき、山一面に蓮華が咲いた。水も蓮華の種子もないはずの山に蓮華が咲くとは不思議なことだ。この蓮華の花をとったものが、今、院にある。

ここで盛彬は、二つの不思議な出来事について書いている。一つは、成合寺の愚白和尚が村人をまきこんでと

った奇妙な言動であり、もう一つは愚白和尚の死にさいして起こった不思議な出来事である。

愚白和尚の奇妙な言動は、その言動の数ヶ月後に能登の総持寺から来た僧によって、愚白和尚の超自然的な力の発現であったことが明らかにされる。愚白和尚は、泉州から遠く離れている能登の総持寺で起きた火災を感知した。そして愚白和尚は、その火災を消化するために、村人に成合寺の境内にある庭石に水をそそがせた。すると、その水はまるで水を熱したものにかけたときに発するような「しゅう」という音を立てて、庭石にしみこんでいったという。

また、愚白和尚が亡くなったときに、山一面に蓮華が咲くという不思議な出来事が起きた。その山は蓮華が咲くような環境ではなかったはずなのに。

注目すべきことに盛彬は、これらの不思議な伝承を否定していない。盛彬は、書かれた文字資料を重んじる一方で、不思議な出来事や話を受け入れる態度をとっているのである。

#### 1-4) 蕎原村の柵の大木

中盛彬は、蕎原村(現在の貝塚市蕎原)の柵の大木を泉州の観光スポットとしてすすめている。この蕎原村にある柵の大木にも、不思議な出来事が伝えられていた。盛彬はつぎのように書いている。

蕎原村柵の木谷に、木のまわりが7ひろ(約7.5メートル)もある柵の木の太木がある。いつのころからか神霊があるとして、柵明神といわれるようになった。この柵の大木のある場所は、昔から高野先達が修行祈禱する場所だった。

ある年、藩士が勸農のために巡村したとき、この柵の大木を見たいと思い、村おさに相談した。村おさは藩士のその要望を聞き入れ、柵の大木までの道を整備した。藩士が柵の大木を見に行くという前夜に、雨風が激しく雷がなり、地震がおこり、整備した道は見えなくなってしまった。これは神が道を作ったことをお怒りになったからだといひ、藩士の柵の大木見学はとりやめになった。私(盛彬)はこのことを父から聞いた。

亥の年(1815?)に、私(盛彬)は興蔵寺、芳元寺などの知人たちとともに、従者に割籠をもたせて、この柵の大木を見に行った。道をのぼり、くだり、ときには葛にすがりよじのぼりなどして、ようやく未の下刻(午後2時ころ)に柵の大木にたどりついた。

木のまわりは、およそ5丈3、4尺(約16メートル)ある。この大木の喬株をとって帰った。今、書院の中庭にあるのがそれである。

盛彬は、蕎原村の柵の大木をめぐる不思議な出来事について、彼の父親から聞いたと書いている。このように『かりそめのひとりごと』では、言い伝えや語り伝えの情報源が、しばしば明らかにされている。これは伝承の生成を考えるうえでたいへん参考になる。

盛彬という人は、たいへん知的な好奇心が強いだけでなく、行動的な人間だった。盛彬は、友人たちとともに、実際に、蕎原村の柵の大木を見に行っている。そして、その柵の大木の株を家に持ち帰っている。盛彬は、さきほどの成合寺の蓮華と同じように、蕎原村の柵の大木のような人間とかかわりをもつ植物は、過去と現在を結びつけているものの一つと考えていたのではないだろうか。

#### 1-5) 信濃堂

「信太の狐」伝説は、中盛彬が生きていた時代にすでに有名な伝説となっていた。盛彬は、この「信太の狐」伝説にかかわる信濃堂を泉州の観光スポットとして人びとにすすめている。盛彬は信濃堂をめぐるつぎのように書いている。

「泉州古蹟記」・「三都実録」・「信田伝記」などを検証したうえで、私(盛彬)の実証によれば、「信太の狐」には、つぎのような実説がある。

信田郷中村に昔から若の御前という信田明神の「つかはし女(信田明神に使役される女性)」がいた。ある日、この近くの狐が人間の女に化けて伯太の谷川に隠れていたとき、信濃国から来た西国三十三所巡礼の3人が通りかかった。信濃国からの3人の巡礼は、美しい女性が川で溺れているのを見て、その理由をたずねた。その女性はこう語った。私は信田村の者ですが、結婚したけれど嫌われてしまいましたので、死のうと思いました。3人の巡礼は、その女性を思いとどまらせて、信濃に連れて帰った。3人の巡礼のうち、一人は独身の男で、高梨氏という武士だった。かれがその女性と結婚した。

高梨夫妻は結婚9年で3人の男子をもうけた。ある日、3歳の末っ子の男の子が、寝ている母に尾があらわれているのを人に話した。これを知った父が驚いて妻を呼ぶと、妻は恥じて姿をかくし、逃れ去った。

妻は住んでいた家の障子に、「恋しくばたづねてもこよ和泉なる信田の森のうらみ葛のは」と歌を書きつけた。

3人の子どもたちは成長し、兄2人は高梨を名乗り、弟は信田を名乗った。高梨2人は村上義清の麾下にはいり、甲州の信玄と対戦後、討ち死にした。

弟の信田は、泉州に来て、人びとに母のことを尋ねた。吉郎太夫という農夫の母がつぎのようなことを話した。

今から16、7年ほど前のこと。夢に一匹の狐が現れて言った。「わたしは若のまへの眷属です。信濃に行き、3人の男子をもうけましたが、はずかしいことがあって逃げて帰ってきました。今夜旧穴で自害しようと思っておりますが、旧穴で自害すると若のまへの名を汚してしまいます。どうかこの家の庭（園）をかしてください。」

夜明けに、吉郎太夫の母が、息子の吉郎太夫に聞くと、吉郎太夫も同じ夢をみていた。2人は不思議に思っ庭（園）に出てみると、古狐が舌を食いちぎって死んでいた。2人は哀れに思い、狐の骸を埋めてやった。

信田は、この話を聞いて、たいそう嘆き、その狐が埋められて所に小堂を建て、田地を買って、僧1人を住まわせて母狐の菩提を弔わせた。その小堂を信濃堂といった。

戦国時代を経て、この信濃堂も失われ、信濃堂にっていた田地も廃れてしまった。

寛永年間（1624～44）に、牛滝山の穀屋坊が訴訟のために江戸に行ったとき、松平豆州侯の家士、信田九郎左衛門尉に、信濃堂をめぐる話をした。すると、信田九郎左衛門尉は、それはわが家の先祖のことで、と言いき、穀屋坊からくわしく話を聞きただした。信田九郎左衛門尉は、穀屋坊が帰国するとき、使者をつけて行かせた。そして壊れていた堂の跡に再び小堂を建て、先祖の後世を弔わせた。この堂を今も信濃堂という。このときの文書が穀屋坊に残っている。

盛彬は、牛滝山の穀屋坊に伝わっている文書をもとにして、「信太の狐」伝説の実説を明らかにしようとしている。その一方で、盛彬は、信田明神に使役される若の御前という女性がいたこと、狐がその若の御前の眷属だったこと、そしてその狐と信濃の人間が結婚したこと、というような超自然的な伝承を否定していない。なお、信濃堂は現存せず、その跡地だけが伝えられている。

以上のように、盛彬は、「この地に遊ばんひとは必ず見るべし」とのべて、五つの場所と事物を泉州の観光スポットにあげている。盛彬は、書き残された文字や文書、過去の出来事とかかわる植物、人間が作ったモノ、そして口頭伝承を総合して、泉州の観光スポットの過去を記述しようとしている。こうした盛彬の過去を見る視点と記述のあり方は、「この地に遊ばんひとは必ず見るべし」とのべた五つの場所と事物以外の場所や事物にかんしても共通している。

## 2 道具や物が語る過去

中盛彬は、文献資料が過去の出来事を明らかにし、それを未来に伝えてゆくことができると同じように、道具や物も過去との関係を表すことができると考えていたと思われる。中盛彬は、過去の出来事とかかわる道具や物にたいする彼自身の関心の深さを示す、つぎのような記述をしている。

安永8年（1779）5月1日に久米田池の堤が決壊した。決壊で流れ出した濁流は山が崩れるような勢いで、その音は、雷のようだった。濁流は数村をおそい、数十の家が倒された。周囲が4、5丈（約12～15メートル）ほどもある黒い巨大なものが、踊るように決壊の濁流の中に現れた。人びとは竜が出現したかと恐れて逃げていった。濁流がひいたあと、人びとはクスノキの根の巨大な分かれを発見した。人びとが竜だと思ったのは、この巨大なクスノキの根だった。根の大きさから推測すると、直径が3丈（約9メートル）くらいの巨大クスノキだった。人びとは、その巨大な根を切り取り、宝にしたという。

私（中盛彬）は、この話を春木村のおさ藤右衛門から聞いた。私（中盛彬）は、その巨大クスノキの根の断片を藤右衛門からもらい、その根の断片で香合・硯箱を作った。今もそれらをもっている。

この久米田池の決壊は、中盛彬が生まれる数年前に起きている。盛彬は、自分が生まれる前に起きた、久米田池の決壊という泉州の大事件について、春木村の藤右衛門から聞き書きをしている。そして盛彬は、久米田池の決壊の記念品ともいうべき、巨大なクスノキの根の切れ端を、藤右衛門からもらい、その切れ端で香合（香料を入れる箱）や硯箱を作っている。

おそらく盛彬は、『かりそめのひとりごと』の記述と

ともに、その香合や硯箱を通して、盛彬の子孫を中心とした後の時代の人びとに、久米田池の決壊という出来事を伝えようとしていたのではないだろうか。

中盛彬が、道具を通して過去の出来事についてのべている例をいくつかみてゆこう。

### 2-1(1) 長滝村の山内長左衛門家の斗櫛

中盛彬は、長滝村(現在の泉佐野市長滝)の山内長左衛門の家に伝わる斗櫛について書いている。

長滝村の禅興寺(『かりそめのひとりごと』には興善寺と記されている)は、天文(1532-55)のころまでは寺領があり、堂宇も残っていた。山内長左衛門の先祖が寺領の管理をしていた。この山内長左衛門の家に斗櫛が伝わっている。私(盛彬)はその斗櫛を思い出すままに描いておく。この斗櫛が使われていたころは、この地域は根来寺の寺領であり、長滝村禅興寺は根来寺の末院であった。

周知のように、泉州の歴史は根来寺と深くかかわっている。中盛彬は、長滝村の禅興寺と根来寺の過去における関係や、どの家が長滝村の禅興寺の寺領の管理をしていたかということ、櫛という道具から説明している。山内長左衛門の家に伝わる櫛は、根来寺が泉州の一部を経済的に支配していた歴史を表している。

### 2-1(2) 根来赤井坊少納言の関連グッズ

中盛彬は、根来寺による泉州の武力的な支配をうかがわせる、つぎのような太刀と指物(戦の際、武将が自分の目印として用いた旗や作り物)についてのべている。

信達馬場村で里正をしていた辻右衛門については、「泉州志」にも記されている。この辻右衛門は、根来赤井坊少納言の子孫だった。根来赤井坊少納言は、根来寺が没落した後、同心(戦国時代、上級家臣である武将の組下に編入され、その指揮にしたがう武士)100人をしたがえて本田家につかえた。その後、馬場村に帰り、農業をして亡くなった。

今の辻右衛門の祖父の和田八が、中風になやみ、金熊権現に祈願し、奇験を受けた。和田八はお礼に少納言の佩刀を金熊権現に奉納した。以後、金熊権現のお祭りの日には、先頭にこの刀が立つ。これを少納言太刀といっている。

文化4年(1807)、根来赤井坊少納言の墓のしるし

の松を伐る、伐ってはならないという争いがおきた。このとき辻右衛門がその由緒の証拠として、根来赤井坊少納言と同心100人の指物を出した。私(盛彬)もその指物を見て写生した。

中盛彬は、金熊権現のお祭りの日に登場する「少納言太刀」の由来を通して、信達馬場村(現在の泉南市信達馬場)の辻右衛門という家の歴史にふれている。この辻右衛門という家は、根来赤井坊少納言の子孫だった。中盛彬が生きていた時代、盛彬をふくめて人びとはその伝承を、辻右衛門家に伝わる指物を見て確認している。

### 2-1(3) 国府の一兵衛家の水桶

国府(現在の和泉府中)の清水は、近世においてすでに名所となっていたが、中盛彬は、その有名な泉とかかわる道具を通して、泉州の歴史を語っている。

国府の一兵衛は大坂城で秀吉の御台所の板先(料理人?)をつとめていた。

この一兵衛が案内人になり、大坂城から国府の清水に水を汲みに来ることがあった。一兵衛の家に一つの水桶が伝わっていた。この桶には「長浜御用」と焼印があった。この桶は4年前に焼けてしまったが、私(中盛彬)はこの桶を写生しておいた。

一兵衛の家に伝わっていた水桶は、国府の清水を基点にして、泉州の過去とつながっている。視線をのばせば、その水桶は、秀吉という一時代の支配者にもつながってゆく。中盛彬は、水桶という身近な道具から泉州の過去にアプローチしている。

### 2-1(4) 大工長兵衛の盆と膳

道具は、それを製作した人間ともかかわっている。過去から伝わる道具が、それを作った人間について思い起こさせる場合がある。中盛彬が生きていた時代、大工長兵衛という人が製作したお盆やお膳が泉州で伝わっていた。この大工長兵衛が製作したお盆やお膳はたいへんな名品だと盛彬は書いている。盛彬は、その製作者の大工長兵衛について、つぎのように書いている。

大坂の島の中で、雁が音屋文七ら5人の男集団が、けんかで有名になっていた。ある日、大工長兵衛という者が、その5人の男集団のそばを通りかかったとき、この5人の男たちとけんかになった。大工

長兵衛は5人の男たちを投げ伏せた。その後大工長兵衛はこの集団に加わるようになった。

雁が音屋文七が人を殺したとき、大工長兵衛は京都に逃げ、後に熊取谷七山村に隠れた。大工長兵衛は小盆膳卓を製作する技術にすぐれていた。今でも大工長兵衛が製作した物はどれも高価である。

大工長兵衛は七山の浄見寺の檀越（檀家）になったので法号が残っている。大工長兵衛の子孫は今も長兵衛と名乗っている。この長兵衛の家は近ごろ、衰えて、七山村から大津村へ移った。長兵衛の家からはかなりの理屈者が代々出ている。

大工長兵衛が一時期その仲間になっていた雁が音屋文七は、当時、有名な無法者だったらしく、曲亭馬琴が「著作堂一夕話」<sup>8)</sup>という旅行記のなかでもふれている。「著作堂一夕話」は、曲亭馬琴が享和2年（1802）の夏に京都と大坂を旅行したときの見聞がもとになっている。

## 2-（5）七山村の刑部作家の油瓶

中盛彬が示す過去の道具や物にたいする愛着で興味深いのは、盛彬が、道具が引き起こす不思議な出来事や話をも記録していることである。中盛彬は、熊取の七山のある家に伝わる不思議な現象を引き起こした油瓶について、つぎのように書いている。

七山村の刑部作は、家から4丁（約400メートル）ほど離れた南柏木というところの田畑で仕事をしていた。宝永1年（1704）9月に、一匹の老狐がこの畑で死んでいた。刑部作は、その狐の死骸をねんごろに埋めてやった。それから14年後の享保2年（1717）5月5日の夜、刑部作は岸の和田から帰った後、灯油がなくなっていたのに求めることを忘れていたことに気づいた。ところが刑部作の妻が（油の）とくりをかたむけると、竹筒に七分目ほどの油が出てきた。その夜、刑部作の妻は不思議な夢を見た。産土神の春日明神の年番神主の仁右衛門の子どもの仁兵衛らしい人が、浅黄の単衣を着て、木の杖をついて座敷から出てきた。この人はいつここに来たのかと思っていると目がさめた。

5月25日に竹筒の油は使い終わった。とくりをかたむけると、かわらけに七分目ほどの油が出てきた。この後、家で使う分には油はいくらでも出てきた。村人が不思議に思い、刑部作の湧き油を見ようというこ

とになった。享保3年（1718）1月9日の夜、大勢が刑部作の家に集まり、4カ所に輪になって、ともし火を4つかかげて、夜話をはじめた。それらのともし火に何回油をそそいでも油はなくなることはなかった。

享保3年（1718）7月25日、城主が鷹野のついでにこのとくりをご覧になり、刑部作にはた（布）とこがね（黄金）を与えた。

月漢和尚が、この不思議な油瓶をめぐる一連の話をきいて、その出来事について文章を作った。月漢和尚は、油瓶の不思議が狐の力ならば、36年間も油が湧き続くはずはない、その油瓶から油が湧き続けているのは、刑部作がもっている「善因」による、と書いた。すると、宝暦2年（1752）年までの36年間、湧きつづけてきた油が出なくなってしまった。そこで人びとはこの油瓶をきつね福だと言っている。

今もこの瓶は伝わっている。私（盛彬）も去年この瓶を見た。この瓶は、1升2合くらいの容量が入る備前焼の瓶で、口が少し欠けていた。

七山村の刑部作という家の油瓶が、ある日（1717年5月5日）を境にして、油が湧いて出てくる不思議な油瓶に変わってしまう。この油瓶の不思議は村の人びとの知るところとなる。村の人びとは、その油瓶からほんとうに油が湧いて出てくるかどうか、ということ、刑部作の家に集まり、夜話をしながら、確かめている。そしてこの不思議な油瓶の話は、城主まで知れ渡る。城主は鷹狩りのついでに、刑部作の家に立ち寄り、この不思議な油瓶を見て、刑部作にほうびの品を与えている。

月漢和尚という僧が、この不思議な油瓶の話に心を動かされて、文章を作った。たぶん村人のあいだでは、刑部作がといねいに埋葬してやった狐の不思議な力が、その油瓶から油を出させているのではなかろうか、というような話が広まっていたと思われる。月漢和尚は、あえてその油瓶の不思議な現象は、狐のしわざでなく、刑部作の「善因」が招いたと書いた。するとその後すぐにその油瓶から油は出なくなった。刑部作の家の油瓶は、突然、油が出なくなったことによって、人びとに不思議な思いを抱かせた。

この七山の不思議な油瓶の出来事は、中盛彬が生まれる60年くらい前に起きている。盛彬は、その油瓶をめぐる記録や言い伝えを整理するだけでなく、実際に、不思議な現象を引き起こしたというその油瓶を見に行っている。

盛彬は、実証性を重んじて泉州の過去の出来事について書いている。同時に、盛彬は、人びとが不思議に感じた体験や、「きつね福」のような、人びとが不思議な現象について語ったことばにも注意をはらっている。

### 3 怪異が語る過去

前述したように、『かりそめのひとりごと』は、人びとの不思議な体験やそれらについての言い伝えをふくめて記述しているところに、一つの特色があると思われる。不思議な体験やそれらについての言い伝えは、死者にかかわる伝承と神霊や妖怪をめぐる伝承に大別される。

#### 3-1(1) 三好実休の墓

中盛彬は、三好実休の墓をめぐるつぎのような話を書いている。

額原村の少し東に三好実休(三好義賢)の塚があった。いつのころからか石碑はなくなっていた。雨が降り、風がさわぐ夕方には、この塚から一団の燐火が出て、塚の上の松の木にするするとあがって燃える。この村の小さな子どもたちは怖がって家に逃げ帰った。

文化12年(1815)11月に阿波の国の人(久米田寺の多聞院)に来て、こう言った。私は三好実休の末孫の者ですが、このほど夢に実休があらわれて、久米田の塚に石碑を建てるように言ったのでわざわざ来ました。この人はもってきた石を建て、多聞院主亮雅和尚をたのんで仏事をおこなって帰っていった。その後、実休の塚から燐火が出ることはなくなった。

石橋直之が、元禄13年(1700)年に編集した『泉州志』<sup>9)</sup>にも、三好実休の墓のことが書かれている。『泉州志』は、「額原村の東に在り。曾孫三好篤慶、近來墓石を建てる」と記している。盛彬が『かりそめのひとりごと』で、いつのころからか、なくなると書いているのは、曾孫の三好篤慶が建てた墓石のことであろうか。阿波の国から来た三好実休の末孫が建てた墓石は、三好篤慶が建てた墓石とは別のもののように思われる。『泉州志』は、三好実休の墓から出た燐火が松の木にのぼり、子どもたちを怖がらせたことについてはふれていない。三好実休の塚から出る燐火や阿波の国から来た三好実休の末孫が見た夢の話は、おそらく泉州の人びとのあいだに伝えられていたフォークロアだったと思われる。

中盛彬は、三好実休の墓をめぐる話が、ほんとうにあったことなのかどうか、ということよりも、むしろ、三好実休の墓をめぐる恐怖の体験や不思議な話が、泉州の人びとのあいだに伝わっていたという事実を伝えてくれている。この点においても、盛彬の『かりそめのひとりごと』は、たんなる地域の歴史書ではなく、民俗誌の要素もあわせもっているといえるだろう。

#### 3-1(2) 幽霊を叱りつけたという男の話

『かりそめのひとりごと』には幽霊をめぐる、少し変わった話が記されている。盛彬が生きていた時代、多くの人びとは幽霊を怖れていた。盛彬は、幽霊を怖れず、逆に叱りつけた、つぎのような男の話を書いている。

宝暦(1751~64)・明和(1764~72)のころに、私(盛彬)の里である熊取村に喜七という農夫がいた。喜七は、大胆で豪邁な気性で、侠にして偏な人間だった。志したことを遂げるためには、水火に入っても果たそうとした。人にたのまれれば自分の身を忘れてそのたのみごとをおこなった。

喜七は仏教について知らなかったが、仏教を信じず恐れなかった。喜七の父と妻が亡くなったとき、喜七は仏壇をもっていなかったので、死者の歯骨を長櫃の上に置いておいたら、鼠が死者の歯骨をひいていってしまった。

後の妻も早く亡くなってしまった。この妻は幼い娘のことを心に思いながら死んでいった。妻は死後、娘を連れてゆこうとして幽霊になって現れた。その妻の幽霊の姿と声は、たいへん悲しいものだった。その幽霊の声を聞くだけでも毛髪がよだつほどだったが、喜七は高軀をかいて寝ていた。妻の幽霊が娘を怖がらせて泣かせるので、喜七は自分が寝るまえに、幽霊を叱りつけ、たたきつけた。3、4日の後、幽霊は出なくなった。

この喜七の妻の幽霊の姿と声は、原文では、「いと悲しく愁然として」と書かれている。だれが、その幽霊の姿を見、声をきいて、「いと悲しく愁然として」と思ったのであろうか。どうやら喜七ではなさそうである。喜七は、娘を泣かせる妻の幽霊を叱りつけているくらいだから。喜七の娘が、母の幽霊を見て「いと悲しく愁然として」と思ったのかもしれない。あるいは、隣の家の人(たまたま、喜七の妻の幽霊に出会ったのかもしれない)。いずれにせよ、この喜七が妻の幽霊を叱りつけると

いう話は、この世に思いを残して死んだ人間は、幽霊となって現れることがあると信じていた人びとを通して伝わっていたと思われる。

### 3-3 葛城山の白鹿

幽霊は、それが存在するかどうかは別にして、人間が変化したものとみなされている。さきの喜七が幽霊を叱りつけた話でいえば、この幽霊が喜七の妻であることは、語り手にも聞き手にもはっきりしている。一方、『かりそめのひとりごと』には、正体がはっきりしないような不思議な生物の出現がいくつか記録されている。

中盛彬は、祖父の嶺盛から、白鹿が葛城山に現れた話をきいている。祖父の嶺盛は葛城山で白鹿を目撃した。盛彬はつぎのように書いている。

岡部長富公が葛城山で猪狩りをしていたとき、申の刻（午後4時ころ）のはじめに白鹿が出現した。人びとは雨のごとくに矢をその白鹿に射たが、一つも当たらなかった。その白鹿は葛城山のふもとの村にかくれた。私（盛彬）の祖父の中嶺盛が、そばにいた人びとに、この鹿は神物だろうと言った。まもなく空はかき曇り、盆を傾けたような激しい雨が降り、雷が鳴り響いた。長富公を避難させ、中嶺盛だけが身代わりとして山頂にとどまった。しばらくすると空が晴れた。中嶺盛はこのときのよろこびに、竜王に宝殿と霊垣を石で作し、奉納した。霊垣には「中与左衛門尉建之」と彫られている。

その後、その霊垣が紀州の領地に少し入っているとあって、紀州の村の人びとがその霊垣の東南の角を切り除いた。するとその村で疫病が流行り、多くの人々が亡くなった。人びとはこれは葛城竜王のたたりだと言って、畏れて奉幣し、おわびをしたら、疫病は終息した。

岸和田藩の岡部長富公が、葛城山で猪狩りをする。その狩りの前日に、岡部長富公は、中家に滞在している。中家と岸和田藩との強いつながりがうかがわれる。中嶺盛も岡部長富の猪狩りに同行している。中家に仕える人びとも、この狩りに参加していたと思われる。その狩りの最中に白鹿が現れた。人びとは白鹿に矢を放つ。けれども不思議なことに1本の矢も白鹿には当たらない。白鹿は姿を隠す。中嶺盛はこの様子を見て、この白鹿は、「神物」＝「神さまではないか」と思う。はたして、突然天候が悪化する。中嶺盛は、長富公を避難させ、自

分が長富公の身代わりにして、山頂にとどまる。嶺盛は、人びとが白鹿に矢を射たことが、葛城山の神さまを怒らせたかと判断したのであろう。また、この嶺盛の行動にも、中家と岸和田藩との強いつながりの意識がうかがわれる。

中村禎里の『日本人の動物観－変身譚－』によれば、日本人と動物との関連の歴史をさかのぼると、山神信仰につきあたるとい<sup>10</sup>。山神が、ヘビやシカやイノシシなどの姿で現れると信じられていた。中村禎里は、『古事記』や『日本書紀』などの神話や『今昔物語集』などの説話集を分析した結果、シカは古い山神の動物形態であるとのべている。中世になると、山神のおもかげをとどめるシカは、だんだん姿を消してしまうそうである。

ところが、『かりそめのひとりごと』によれば、泉州では、江戸時代の後半に、シカが葛城山の神の動物形態として現れている。もしかすれば、説話などのような作品化された語りと、『かりそめのひとりごと』における記述のような体験談とのあいだには、山神の動物形態の信仰伝承にかんして、ずれがあるのかもしれない。中盛彬の祖父の嶺盛が目撃し、体験したという白鹿の話は、日本人の動物観を考えるうえでも貴重な記述といえよう。

### 3-4 谷川港に現れたヤマウバ

葛城山に出現した白鹿は、中嶺盛によって、神さまと判断されたが、何とも断定しがたい不思議な生物の出現が、『かりそめのひとりごと』に記されている。

明和のころ（1764～72）、谷川の港（現在の岬町谷川）で、徳右衛門という者がいつものように朝早く起きて、港の方を見ていた。すると、港のうしろの山から、美しい女髪で腰をすこしだけおおった、ほとんど裸の者が現れた。その者は、港に停泊していた多くの船を見回して、阿波の国の船に、しずしずと入っていた。

徳右衛門はこの様子を怪しいと思い見ていたら、しばらくするとその不思議な者が船から出て来て、もとの山へ帰っていった。日が昇っても、その阿波の船だけは動かなかった。いっしょに連れ立ってゆく船の人びとが、その阿波の船に入ってみると、その船の乗組員の男たちはみんな漏精して死んだようになっていた。

医者をおよび治療すると男たちは生き返った。人びと

は、どうしてこんなことになったのか、その船に乗っていた男たちにたずねた。男たちはつぎのように語った。たいへん艶めかしい女性がどこからともなく現れて、色っぽいことばで誘ってきた。その女性と交わると夢かと思ったが、その後はわからなくなってしまった。

徳右衛門はこの話を聞いて、その朝に見たことを人びとに話した。人びとは不思議に思ったが、その女性が何者かはわからないままだった。

貝塚の里の源兵衛という者が、谷川の港にしばらく滞在していた。この源兵衛が徳右衛門父子からその不思議な女性の話を聞いたが、徳右衛門は遠くから見たので、目耳鼻齒も人とはちがうようだったが、はっきりわからないと言った。私(盛彬)は、貝塚の里の源兵衛から聞いた話をもとにして、その女性の姿を描いた。この女性は、本草学の靈異述異などにのべられている野婆山姑のたぐいではないだろうか。

この話には、谷川の港が栄えていたということが背景にある。谷川の港は、この地の領主の桑山氏勝が慶長年間(1596~1615)に築いたとされている。その後、この港に土砂が堆積するようになったために、貞享元年(1684)から5年をかけて新しい港が築かれる。中盛彬が記録している不思議な生物は、この多くの船でにぎわう新しい港に現れたと思われる。

出口神暁は、この話の項目に「谷川湊の妖怪」と題をつけている。しかし、江戸時代の泉州の人びとが、谷川港に現れた不思議な存在を「妖怪」と呼んだ可能性は低い。というのは、妖怪ということばは、江戸時代にはあまり使われておらず、明治時代以降に使われるようになったことばであると考えられているからである。

中盛彬は、本草学の知識にもとづいて、谷川の港に現れた、その不思議な存在を「野婆山姑のたぐい」ではないかと推測している。「野婆山姑」はヤマウバと読むと思われる。最近の妖怪研究によれば、いわゆる妖怪は、江戸時代の後半ころから、本草学の知識の浸透や出版技術の発展とも関連して、視覚的に図像としてさかんに表現されるようになっていったとされている。盛彬も伝聞をもとに谷川の港に現れた「野婆山姑」の図を描いている。

### 3-5) にせの天狗使い

江戸時代の終わりころになると、武士以外の男たちのあいだに、剣術などの武術がひろまってゆく。中盛彬

は、武術でもって、妖怪の出現を明らかにしようとした男の話について書いている。

貝塚の里に干鯛屋という酒店がある。三宅五郎兵衛はその家の二男である。五郎兵衛は幼年から武技をたしなみ、今は天王寺秋の坊につかえて、三宅織部といっている。

ある年、紀州から天狗を使役するという男が来た。五郎兵衛がその男に会い、天狗を見せることができるかときくと、見せることができるといった。五郎兵衛はその天狗使いに天狗を見せてもらう約束をした。約束の日、水間寺山の頂に壇をかまえて供物をして、戌の刻(午後8時ころ)に、五郎兵衛と天狗使いは山に出かけた。この天狗使いは五郎兵衛に天狗を見せることができずに逃げ出した。五郎兵衛は大坂までこの天狗使いを追いかけ捕まえて、問いただすと、この天狗使いは、三八という白い狐を使って人をだましている男だった。

この話では、天狗は出現しない。三宅五郎兵衛という武術の鍛錬をつんだ者が、天狗使いのウソをあばいている。しかし、人間が天狗に引き裂かれるとか、天狗に蹴殺されるというように、天狗を恐怖する人もたくさんいたと思われる。興味深いことに、中盛彬も天狗の存在については必ずしも否定していない。盛彬は、「昔に今にさまざまの説、齊しからざれどここにてかくよぶものの怪をなし妖をせしこといと多し」と書いている。盛彬は、天狗についてはいろいろの説があるが、天狗とよばれるものが、あやしく不思議な事をすることは多いと書いている。

### おわりに

中盛彬は、泉州の過去の出来事にかんする多くの文献を読み、泉州の歴史とかかわる道具や物に関心をもち、そして体験談や言い伝えのような口頭伝承も重んじていた。盛彬は泉州の過去の出来事を総合的に理解しようとしていたといえよう。そうした盛彬の過去と向き合うしかたは、盛彬が『かりそめのひとりごと』で「この地に遊ばんひとは必ず見るべし」と書いて言及している泉州の場所や事物の記述に端的に表されている。また、「この地に遊ばんひとは必ず見るべし」ということばに表されているように、『かりそめのひとりごと』は江戸時代後半の泉州のガイドブックとしても読むことができる。

付記：本稿は、2004年8月28日に熊取ふれあいセンターでおこなわれた〈泉州学講座〉での発表をもとにしている。

#### 注

- 1) 『熊取町史・本文編』2000.
- 2) 桑原 恵『幕末国学の諸相：コスモロジー／政治運動／家意識』大阪大学出版会 2004.
- 3) 校訂・解題：出口神暁『和泉史料叢書・拾遺泉州志全』和泉文化研究会 1967.
- 4) 山本 卓「鬼洞文庫」『文学』2001. 5-6月号
- 5) 出口神暁前掲書
- 6) 出口神暁前掲書
- 7) 『かりそめのひとりごと』からの引用要約はすべて、出口神暁前掲書をもとにして、筆者が要約したものである。
- 8) 曲亭馬琴「著作堂一夕話」『日本随筆大成第1期第10巻』吉川弘文館 1993.
- 9) 石橋直之『泉州志』（寺田兵治郎編『泉州史料』1915～1917.）
- 10) 中村禎里『日本人の動物観——変身譚——』海鳴社 1984.